

# 金井東裏遺跡

# 「甲を着た古墳人」を科学する

## 金井下新田遺跡の発掘調査が進んでいます

金井下新田遺跡の発掘調査が平成 26 年 4 月から始まりました。金井下新田遺跡は、金井東裏遺跡の「甲を着た古墳人」が発見された場所から 400 m ほど南に位置する遺跡です。金井東裏遺跡と同じ 6 世紀初頭の榛名山噴火による堆積物の下から、鍛冶遺構・土器集積遺構・囲い状遺構などが発見されています。

鍛冶遺構は 5 世紀後半のもので、一辺が約 10 m の大型の竪穴住居中央部の床面に鉄器を製作する鍛冶炉がありました。県内でも古い時期の鍛冶遺構の一つで、金井東裏遺跡から出土した豊富な鉄製品との関連があると考えられています。

土器集積遺構は 6 世紀初頭の火山灰の直下で見つかりました。土器が置かれた範囲は直径 2m で、金井東裏遺跡で発見されたものより小規模なものでした。土師器の杯を中心に土師器や須恵器 370 個ほどが集められており、土器と一緒に 400 個ほどの滑石製白玉も見つかりました。

囲い状遺構は「かこいがたはにわ 囲形埴輪」に表現されているような重要施設を囲っていたと考えられるもので、南西方向に広がっていることが推定されています。金井下新田遺跡では、国内で初めて「あじろがき 網代垣」で囲われた構造を完全な状態で確認することができました。

## 榛名山東麓/金井遺跡群の解明に向けて

重要な遺構や遺物の出土が相次いでいる金井東裏遺跡と金井下新田遺跡は、ともに榛名山東麓にある古墳時代の遺跡です。周辺には金井丸山古墳や中筋遺跡など、これまでも同じ時期の遺跡がたくさん発掘調査されています。この地域は榛名山の火山灰や火砕流堆積物に覆われた 1500 年前の空間が広がる古墳ワールドなのです。

金井下新田遺跡の発掘調査は現在も継続中です。これからも、榛名山東麓/金井遺跡群の調査にご注目下さい。

榛名山東麓の古墳時代遺跡  
1500 年前の古墳ワールドが埋まっています。▶



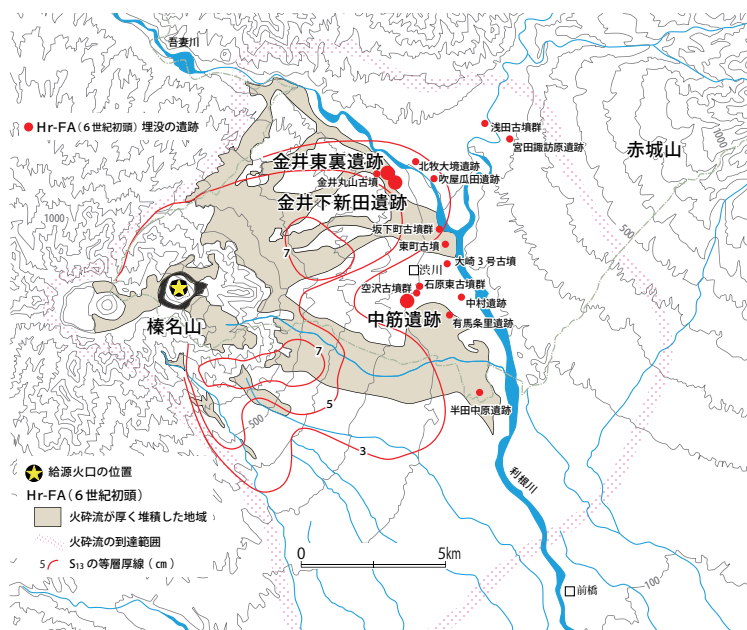
金井下新田遺跡の鍛冶炉のある大型住居  
中央部に鉄器を製作した鍛冶炉がありました。



小さな土器集積遺構  
祭祀がおこなわれたと考えられています。



国内で初めてその構造が完全な状態で確認された網代垣 重要なエリアを囲っています。



## 平成24年11月の大発見から

渋川市にある金井東裏遺跡は榛名山の北東麓に位置する遺跡です。上信自動車道の建設に伴い、平成 24 年 9 月から平成 26 年 3 月まで発掘調査が実施されました。

平成 24 年 11 月、6 世紀初頭の榛名山の噴火で発生した火砕流により埋もれた溝の中から「甲を着た古墳人」が発見されました。国内初、火砕流で被災した古墳人の大発見となりました。

平成 26 年 4 月から、南側の金井下新田遺跡の発掘調査も始まり、榛名山東麓の古墳ワールドが見えてきています。



▲金井東裏遺跡は、吾妻川右岸の榛名山北東麓に形成された扇状地の端部にあります。



▲人類学者 4 人による人骨の詳細調査

## 出土品の調査・研究が進んでいます

金井東裏遺跡では、「甲を着た古墳人」の他に「首飾りの古墳人」、幼児、乳児の合計 4 人の火砕流で被災した人たちの骨が発見されました。周辺からは冑や別の甲、鉄矛、鉄鏃などの古墳人の持ち物出土し、火砕流堆積物の下から竪穴住居、畠、土器集積遺構、古墳などが発見され、ガラス玉、赤玉なども出土しました。

現在は、これらの出土品の調査・研究を進めています。ここでは、その成果や途中経過を写真でご紹介します。

▼重要遺物が出土した金井東裏遺跡 4 区と 9 区

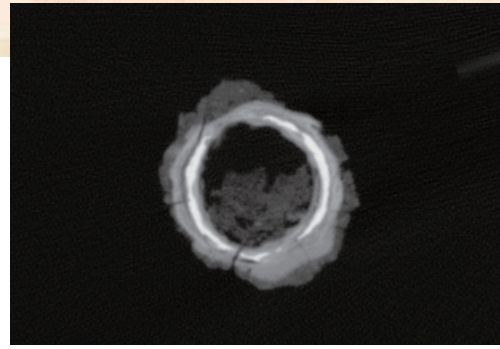


当事業団ホームページをご覧ください。  
<http://www.gunmaibun.org/>



公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
〒377-8555 渋川市北橋町下箱田784-2  
☎0279-52-2513





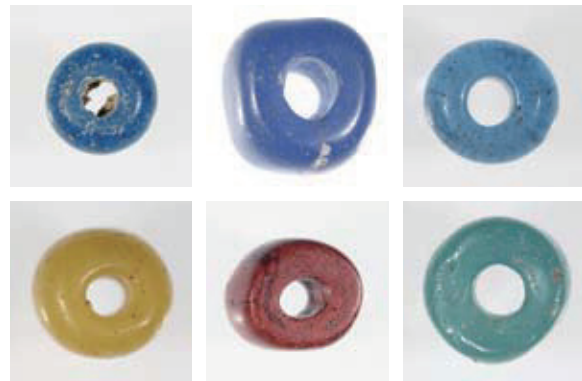
1号人骨(甲を着た古墳人)の近くで見つかった鉄製矛は、CT画像から八角形の断面をしていることがわかりました。



鉄鏃の鏃を落とすと、球形の鹿角製装具が付いていることがわかりました。(白い球形部▶)



1号人骨(甲を着た古墳人)の近くで見つかった鉄製矛の柄には、直弧文という日本の伝統的な文様が刻まれていました。



3号人骨(首飾りの古墳人)と、すぐそばの土器集積遺構からたくさんのガラス小玉が出土しています。成分の違いによって色が違います。



溝にそった小道を歩き下る古墳人たちの足跡



火山灰の上を歩いた古墳人の足跡  
子ども(左)・おとな(右)

出土品を科学する

古墳人を科学する

空間を科学する

甲と冑を科学する



1号人骨(甲を着た古墳人) 面長な顔つきの「渡来的形質」



3号人骨(首飾りの古墳人)の頭骨 鼻の広い平たい顔つきで古墳人の中では関東~東北タイプ



4号人骨(幼児)の発見状況 両手、両足を広げ、頭骨と脛骨の一部が残っていました。



1号人骨(甲を着た古墳人)の左脚部分を確認する田中教授(九州大学)



1号人骨(甲を着た古墳人)の上あごの歯からDNA分析試料を採取しました。



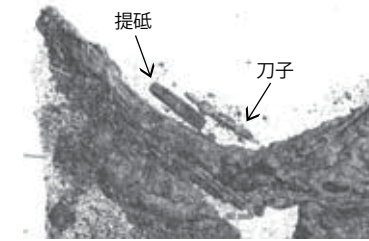
水が浸透しない環境をつくるキャピラリー・バリア機能を調べる西村教授(足利工業大学)



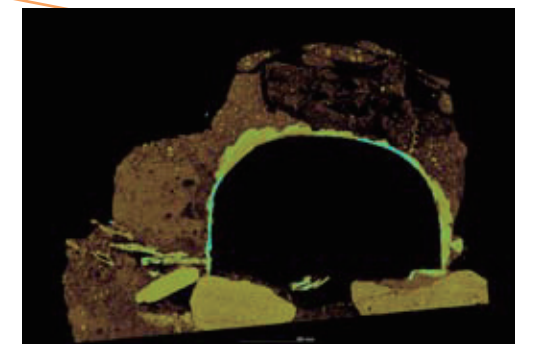
1号掘立柱建物の柱穴の変形から火砕流の衝撃威力を調べています。(群馬大学若井研究室)



骨製小札は全体を丸めた状態で残っていました。三段構造で上から13枚、15枚、17枚で構成されています。



CT画像に映った1号甲内部の 刀子と提砧



冑の縦断面CT画像。平に置いた冑の右上から1号人骨の顔面がかぶさって、左目部分がつぶれています。冑の内面は未調査だが、布や皮革などのあて物が発見されるかも知れません。